甲状腺外科草子 85

名補佐官武田信繁の本懐：川中島

杉野　圭三

武田典厩信繁は武田軍団の中でも別格で信玄の影武者とも言われ、家中から信頼と尊敬を集めていた。真田源二郎信繁（幸村）の名は、武田信繁を尊敬していた真田昌幸による命名とされる。

武田信玄と上杉謙信の間の「**川中島の戦い**」は第五次まで行われ、最も有名なのが**第四次川中島決戦（永禄四年、1561）**である。

妻女山に陣取った上杉政虎（謙信）の兵は13,000 人、信玄は 10 月 27 日深夜、海津城から高坂昌信・馬場信房の別働隊 12,000 人を妻女山に向わせた。世に名高い「**啄木鳥（きつつき）戦法**」である。

上杉軍はこれを事前に察知、密かに山を下り千曲川を渡って武田軍の全面に布陣した。頼山陽の『**鞭声粛々（べんせいしゅくしゅく）夜河を渡る**』の詩に謳われ有名となった名場面である。この時、八幡原に鶴翼の陣で布陣した信玄本隊は 8,000 人のみとされる。

海津城（松代城）　　川中島五戦記

朝霧が晴れ、突然目の前に上杉軍が出現すれば、普通の将兵であれば動揺し総崩れになってもおかしくない状況である。精強を誇る上杉軍の車懸りの猛攻により、武田本陣を守るため、武田信繁、山本勘助、諸角虎定らが次々と討死にし、本陣も壊滅寸前となった。この猛攻を妻女山攻撃の別動隊到着まで堪えた所に武田軍指揮官と兵の強さが窺われる。

天と地と（1969）　　武田信玄（1988）

大河ドラマなどでは「謙信と信玄の一騎打ち」のみが取り上げられるが、武田信玄の本陣を文字通り死守した信繁たちの奮迅こそがこの戦いの名場面である。

通説では、この戦いの前半は上杉有利、後半は武田有利の引き分けとされる。しかし、情報戦で上杉方の移動を察知できず信繁や山本勘助などの有力武将を含む多くの戦死者を出した武田方の戦術的敗退と考える。また、局所に拘泥し長期の無益な戦いの消耗を考えれば、戦略的にも大きな痛手だったであろう。

川中島古戦場（八幡原）　　武田二十四将

武田典厩信繁九十九箇条を今一度振り返る。

2.戦場においていささかも未練を為すべからざること。『呉子』に曰く、生を必ずする時は則ち死す。死を必ずする時は則ち生く。

42.敵味方、打ち向かふ時、いまだ備へを定めざる所を撃つべき事。語に云く、能く敵に勝つ者は、形なきに勝つ。

73.味方敗軍に及ばば、一入（ひとしお）挙(かせ)ぐべき事。「穀梁伝」に云く、善く陣する者は戦はず、善く戦ふ者は死せず。

自己の信念・信義に生きた日本戦史における屈指の名将終焉の地である。

参考資料：甲陽軍鑑（佐藤正英）、Wikipedia

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2023 年 12 月 14 日